

2025 フクシマ連隊キャラバン報告書

全港湾東北地方小名浜支部 四家 啓瑚

私は今回5日間あるうちの前半3日間に参加しました。まず、小名浜支部としてキャラバンを主催するにあたり被災地の紹介、震災前後での違いなどを説明するための文章を作りました。いざ、文章を作ろうとした時に自分が隣町のことなのに何も知らないことに気づきました。そこで、インターネットで調べたり、知り合いの被災地出身の人に聞き込みをして、情報を集めました。震災と原発事故による人口の減少、放射能汚染による特産物の被害、住み慣れた街に住めなくなり強制的に転居しなければいけない辛さなど心が痛くなるような内容ばかりでした。ただ、14年たった今ほんの少しずつですが、人が住める地域が増えていたり、住んでいる人々が暮らしやすい環境作りが進められているという情報もあり、徐々に徐々に復興へ向かっているのかなと思うところもありました。

いざ、キャラバンが始まり結団式でキャラバン隊の仲間達と顔合わせをして懇親会を開き親睦を深め、次の日フィールドワークに行きました。伝承館と廃炉資料館で震災当時の状況、なぜ原発事故が起きたのか、原発事故の被害の大きさ、廃炉へ向けての計画、汚染水の浄化の仕方また浄化されたアルプス処理水の処分の仕方などを学び、子どもの頃にはよくわからなかった原発事故の怖さを知りました。

次の日には浪江町の津島地区に行き、原告団の方達の震災当時のまま放置されている住居を見学させてもらいました。築何十年も経っている立派なお家も人が住まなくなると、中は野生動物に荒らされて、床も抜け落ち、たとえ避難区域じゃなくなってもまた人が住めるようにはならないと思えませんでした。家を見学させてもらった後、津島公民館で原告団の方に話を聞かせてもらいました。現在ほど通信環境が整っておらず、原発事故の避難マニュアルなどもなかったため、事故が起きた時に避難した方向が風下で、放射能度が1番高い所に向かって避難していたこと。住めなくなった我が家を取り壊す決断を迫られたこと。何十年も続いてきたのどかに暮らせる田舎ならではの、ご近所との絆、コミュニティを断ち切られたこと。どれも、想像を絶するほどの辛さ、悲しみだったことが伝わりました。

私が参加したのはここまでですが、自分の想像していた被災地とテレビやインターネットなどを通じて見た被災地、どちらも全部ではないですが、実際に行って見た被災地とは違うところが多かったです。実際に足を運ばないとわからない、被災地の悲惨さ、被災者の苦しみなどがありました。土地の復興は少しずつ進んでいるのかもしれないけど、被災者の心の復興は少しも進んでいないと思いました。

この福島連隊キャラバンが少しでも被災地、被災者の復興に繋がられるよう、また原発ゼロの日本を目指して来年もがんばります。